

[042] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339030>

出版情報 : 史淵. 42, 1949-12-15. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

彙報

第二回東洋史研究會研究發表要旨

唐朝前期流民の因由

河原由郎

流民は逃戸浮戸浮客という文字で現わされているが、又流民とそのまゝの用語を用いているものもある。荒政叢書卷一に流民如水之流と云々して、流民の性格を表現しているが、要するに流民といい逃戸浮戸と言ひ、共に本籍を離れて他郷に流浪しているものを指すのであつて、支那の歴史を通じ大なる社會問題として政治經濟の多分野にわたつて大いなる作用をなしたものである。大体このような重要な社會問題を唐代のみに限定することは流民の史的性格を一貫して把握する上に頗る難事と言わねばならぬ。唐代の初期流民は隋末の争亂にも多大に影響されているだらうし、又南北朝、隋の土地制度に附隨した諸事象にも左右されたであらう。唐末の流民は又五代宋朝に多大の影響を與えたことも明かである。従つて唐代の流民を論ずるとせば、論を南北朝或はそれ以前に、更に又、降つては五代宋朝の流民活動に言及せねばならぬ。然乍ら初期流民の形態を究めることは、自ら隋末に及び末期のそれを究めるこ

とは五代の流民の性格に通ずることにもなる故、この場合は唐代流民のみを限ることにする。而して唐代流民もその因由、内容、活動を論ずる場合性格的に安史の亂を境界線として二分することが出来る、従つて論述の便宜上唐代流民を前期と後期に分ちたいと思う。今日此處では特に前期流民の因由について論じたい。

隋の大業中戸八百七十萬、今戸三百萬と高宗の永徽三年戸部尙書高履行が帝の下問に應じ奏答しているが、このような戸口の激減は兵亂のあとをうけた社會不安による戸口申告の不履行戸口調査の不徹底、出生率の減少もあらうが、流民の激増は否定出来ぬ實現と申してよい唐朝前期の經濟政策は班田制である（この制度の性格については大いに検討の余地があり支那文獻にみる理想主義的形式論に終始した傾大であるが要するに經濟政策の根本であつたことには間違ない）然してこの政策の確立には、民の土着を前提條件とするものであつて政策の根底から流民防止は必然的なものとして強調されたのである。土地私有の感情は人間の本性からの欲望であり、一種の本能でもある。これに反して土地公有の政策は私有の本能に對する理性であり意志でもある。唐朝前期は歷朝、この意志的統制の強化によつて戸口の確保に努力した。然乍ら一面、私有の本能は南北朝隋代の公田實施の極時ですら十分作用したのであるから、唐初の社會不安に、この本能がより一層働いたことは

察知出来る。要するに土地公有の理性と土地私有の本能との相剋磨擦が流民の發生に種々の様相を展開したものである。而して前期にあつては、後期のそれと比較すればより理性が政策の面に採り上げられ、流民防止の策が種々講ぜられたのである。然乍ら謂う處の本能そのものは、無くなつたことは絶對になく、王家をとりまく官吏、貴族、寺院の私有欲かかる意味の本能は王家の理性が如何様に働いても常に、社會に強力に作用したのである。官吏、貴族、寺院の兼并の様相は省略することにするが要するに法令上は如何様に兼并を禁じようとも（唐律）制度上には權門豪家の土地廣占を認めざるを得なかつた。換言すれば權門豪家の寺觀の廣大なる土地占有を容認した上の班田制であつた處に本質的欠陥があり、貴族政治の當然の結果とも言うべき缺點が確認されていた。従つて田地兼并由る百姓の流亡は止むを得なかつた。寺院の土地兼并由る俗のそれと何等變る處なく、殊に無盡財を擁して大衆に向つて金融的活動をなしたことは、注目せねばなるまい。兼并由るに流亡の因をなしたのは誅求であらう（省略）守山開業書史集にも流民の因を述べているがその中に、「在本籍本籍官吏之罪也。在他所別他所官吏之罪也」と申し流民の困乏轉死の責は官吏にあるとしている。これは流民史を通じて申されることであつて、愈々も流民防止の根本策として賦斂寛則自然安土なる旨を強調していることにより大体肯定出來よう

（省略）

兼并由る誅求、これに常に連關性をもつものは、天災地變である。冊府元龜卷七〇帝王務農の條に、大軍之後必有凶年水旱相と申しているが争亂の時には天災あり、天災あらば兵亂革命を思わしむるのは支那の革命觀とも申すべく天災大なれば國情不安を來たし野心家はこれに乗ずるようになり、民の困窮を増加し民を流亡せしむるの一因をなすものである。而して傳承の天災宿命論は支那の政治をして、積極的に天災除去の策をとらしめなかつたのである。開元年間に姚崇捕蝗のことを明記しているが、それによると蝗害も一つの天命として姚崇の捕蝗奏請ははじめ天に違うの旨で反問されたのである。これは當時の人々が天災を天命として敢えて、天を恐れて積極的防止策を講じなかつたのを示す一例である。全体として正史だけでも天災地變の記事は枚擧にいとまない。然し何等これに對し根本策が講ぜられていないことには一驚を禁ぜざるを得ない。

かくて兵亂と天災、兼并由る誅求というように此等が相互に相關連し互に作用してその害毒を大にして民を流亡せしめたことが流民の因をなすものである。然しこれは所謂一般論であり、流民の因由は常にこの一般論的なものが時代の特相に相應じて、特種の様相を展開するものであることに注目せねばならぬ。唐朝前期の國家經濟政策の特色は土地公有であり、これを檢討することは、この制度の真相を

把握すると共に、その中に生活している百姓の状態をも明かにし、百姓が何故に流亡せねばならなかつたかの特殊事情も了解出来ると思う。幸に熾燼吐魯蕃、田土の戸籍殘卷はこの地域の各戸の状況を知るに頗る便宜であり、その中にみる受田と租額の實相、退田、還公園の實在、里正の權能の實態の特相を知り、各戸の流亡を考察するに便利である。(省略)

史學懇話會

第十八回(九月二十七日)

今回は人文地理學の臨時講義にこられた岡崎高等師範教授三上正利先生の歡迎會を行い、先生を中心に種々歡談が交わされた。出席者十名。

第十九回(十月四日)

今回は本學名譽教授前東洋史主任教授重松俊章先生の歡迎會を行った。先生は御退官後郷里松山市に居住せられ、今回はじめて、來學されたのである。慈愛あふるゝ先生御近況のお話、懷舊の歡談の中にも、史學と史學者のあるべき姿を懇切に御教示下され、今なほかはらぬ先生の史學に對する熱情に一同感激したことである。出席者十九名。

西日本史學會

本年新制大學の發足と共に各地に史學研究者を一丸とし

た學會設立の機運が動き、西日本地區に於ける史學會の結成を見るに至つた。

九大がその結成の世話役となり、各地の盛なる意欲と呼應して、六月五日、九州史學會春季大會の第二日目の午前中に西日本各地より參集の史學研究學徒が集つて、學會設立の打合會を行った。その際全員一致の下に學會設立を決定し、各地に於て同志を糾合することになった。勿論既成の學會とは緊密な連繫をとり表裏一体となつて史學研究に邁進することを申合せた。各縣毎に支部及び分會を設けて、その設立後西日本史學會の結成に及ぶことになり、參集の各準備委員は夫々各地の支部結成に努力する様にした。

その後準備委員を決定各地の支部結成を促進した。先福岡に於ては九月十四日支部發會式を森教授の記念講演後行ひ、大分に於ては、竹内、日野兩教授を迎へ、九月廿一日支部を結成、熊本にては九月廿五日發足、長崎は十月五日結成、と各地に於て支部の結成を見た。こゝに於て十月八、九兩日の人文科學委員會歴史部大會を機に西日本地區全体の史學會を結成することになり、十月七日午後九大に於て「西日本史學會」の發會式を行った。各地よりの準備委員參集の上、學會設立し本部を取敢へず九大に置き、委員長に本學日野教授を、副委員長に竹内、小林兩教授を選出して今後の運営に關する協議をなした。本會の重要な使命は發表機關たる雜誌「西日本史學」の刊行と學會の開催

であつて、西日本地區の史學研究學徒の大同團結の結果は今後の活動如何にかゝつてゐる。

各支部長は左の通（現在決定の分）

福岡支部 九大教授 竹内理三

熊本支部 熊本大教授 原田敏明

大分支部 大分大 祝 宮靜

尙佐賀支部は十月廿九日に結成予定である。明年春季大會を九大に於て秋季大會を熊本大學に於て開催することに決定した。

西日本史學會會則抄

二、本會は史學及歴史教育の發展に寄與する事を目的とする。

三、本會は前條の目的を達成するために次の事業を行う。

1、學會講習會等の開催

2、會誌の刊行

3、その他史學研究に必要な事業

人交科學委員會第二部（史學）

學術大會

本學術大會は人文科學委員會及び九州史學會共催の下に、十月八九兩日に亘り、午前九時から本學法文經十一番教室に於て行はれた。

第一日は「都市と農村」、第二日は「文化交流の問題」の兩主題の下に左の諸講演が行はれた。

なほ九州各縣を主に鳥取、岡山、廣島、山口等より熱心な參會者は二百名近く、活發な質疑應答も行はれ成功裡に終會した。なほ講演要旨等詳細は「人文」に掲載される筈。

〔第一日〕「都市と農村」

一、明代鄉村組織の二型
— 浙江海鹽縣を中心として —

小畑龍雄

一、アジア的封建制に於ける農村とギルドの構造分析

今堀誠二

一、中世都市の社會構成

今來陸郎

一、封建都市の成立

豊田 武

一、古代の農村

竹内理三

一、近世農村の都市化

原田敏明

〔第二日〕「文化交流の問題」

一、廣開土地好太王畫杆を出した新羅の墳墓に就いて

有光教一

一、通古斯族の發展とシナ文化

日野開三郎

一、ウオードの天才論とヨーロッパ思潮

小林榮三郎

一、説話傳播の一例

村川堅太郎

一、日清戰爭後に於ける日華の文化交流

鈴木 俊

一、文化交流より見た原始クリスト教

井上智勇

史學關係講義題目

昭和二十四年度二學期

國史

中世對外交通史

森教授

原始佛敎論

千瀉教授

演習 後法興院記講讀

同

中亞佛敎史

同

貴族社會の成立

竹内教授

西洋哲學史(現代)

田邊教授

古文書學

同

中世哲學

テロリエ講師

演習 日本古代史

榎垣講師

中世哲學史

同

同 古學派

西尾講師

西洋經濟史

宮本教授

日本思想史

西尾講師

演習 日本經濟史の特殊問題

同

中世文化と佛敎

同

ドイツ私法史

吉田助教授

東洋史

日野教授

ロシヤ近代政治思想史

具島教授

遼初の遼東經略

同

日本企業法政策史

竹原助教授

演習 遼史

同

英國社會保障制度の沿革

高田教授

西洋史

小林教授

英國社會保障制度の沿革

清水教授

フランスに於ける集團主義的歴史觀の發展

同

英國社會保障制度の沿革

同

演習 Beard: an Economic Interpretation of the Constitution of the United States

同

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

同 Sembart: Der Bourgeois

同

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

其の他

同

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

連歌と俳諧

小島教授

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

古事記の構造

福田助教授

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

演習 源氏物語 宇治十帖

同

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

演習 日本教育史の諸問題

平塚教授

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

演習 日本美術史

谷口講師

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

宋末元明初の思想

楠本教授

今學期は「人文地理學」の臨時講義のため、岡崎高師の上三正利教授に來學を願ひ、九月二十七日より十月七日まで之を行つた。講師の御好意に對して感謝の意を表す。

同

新制大學教養部は九月より開始せられた。歴史關係の教

官は左の如くである。

東洋史 鈴木 俊教授 第一分校勤務

同 江島壽雄助教授 第三分校勤務

同

同

同

同

國史 西尾陽太郎助教授 第三分校勤務
同 檜垣元吉助教授 第一分校勤務

九州史學會本年度委員

顧問

委員長

常任委員

長 壽吉
重松俊章

小林榮三郎

森 克己

竹內理三

檜垣元吉

渡邊正氣

松垣 裕

船木勝馬

堤 市三

日野開三郎

西尾陽太郎

安藤精一

三木俊秋

平島貴義

山口宗之

松永雅生

牧 久

集會幹部

委員

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

編輯幹事

委員

同

同

同

同

書記